十

第十

共五十四巻

渡利又良邑

松浦氏

2011.22
中会図

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

てうのあやまちをきくつもり
きこえやましくいふやうなんなり
よ人つのたまひそとくし
きこえひ給へれどしよ
うひやうそくみし給へ
物ともおうり人かう
そいまてさうなりつ
やくやうきのなうこと
をおつまくいもとる
ろうかのろくろ木のあぬと
もうみわくをつくる

ほうさのものとをあつう
ものどものひさあ
さ夜うしつくみ
をくなくとてう
人の月日頃のへらんほ
みうつれおひくる
よさらかくれぬそ
これやうそひまくきのひあ
のんほくのたせうこうう
ミヤスノ源ニ
うへまさ夜うとあねを
侯羽
てうやうのうさもうえをなり

ひさ海よおむ〳〵そちほうとう月をおやうなりつ
えたひしくあうまうまうもおむさうれさうそれ
うちよいうふうやまをて思ひまし海うう海は将
たうこれをちのほうくうくほ中をぐ〳〵まめ
つ〳〵えほんあひのひ〳〵えほんこれ
とおぼ〳〵みさくまうそうもうし
おぼ〳〵ほくあられてひよもくおぼ
をみしとおむをつひまとえ
きほいよくひくるうる海ほ
海まそやしめる屋もいうよ
となのほくうるやしほよ

かうつくさもさもひてしやうくとうめて思ひまれ
れをうよこれをうとなくくひうきほうくおむ
ふうほんとのちをもちなくうつれてとうくる
ちまつうよなる海へくすひもげよんするる
叩くおふはをよるうきまたなりしのこす
くとなえ海ならひよしかたも結ととて
ねひやうしなやうくぬ結めそのうえと
さうまつくら出よくんやうなる
うつきのわをいいもあをそこをあみ
きうお結のうくおうくくくくく
風そうひやへふうつ風いやひや〳〵

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

うみ喰ゝ払ゐ人なゝ(イ)うゝ
うゝなゝをゝりゝゐ四ゝ
ゐゝさゐゝなゝうゝまゝてゝまゝ
双地 ゐゝ 系抜 此系ニ並テハトモリコトクノ三成ト云ヘ
ミヤス おゝうゝの払ゐ別ゐう
そ聖への払ゐゝ係心 ゐゝ
れゐゐ約うゝをゝりゝたゝ
ミヤス おゝゝゐもゝひゝ入ほゝうゝ(イ)
ゐのゐゝゐのみゝさゝうゝり
う紙とゝゝまゝうゐひなゝわゝ
不ニ及ニ うゐゝまゝうゝをゝゝ
うゐゝまゝうゝをゝゝ

ゝくゝのゝうゝはゝうゝさゝまゝをゝみゝ
ゝそゝとゝあゝひゝなゝくゝなゝみゝさゝくゝ
をゝこゝゐゐやゝうゝなゝるゝをゝりゝ
ゐ下向イ うゝうゝくゝしゝゐゝさゝ光ゝうゝ
双地 ひゝな 男 係 をゝりゝなゝさゝけ
のゝさゝあゝうゝさゝうゝくゝりゝひゝほゝ
をゝなゝくゝろゝつゝうゝさゝ也ゝひゝ
ゐゐうゝくゝてゝそゝもゝさゝゐゝんゝとゝそゝ
ゝゐゝうゝそゝもゝさゝゐゝ伊勢ノ昌ニ双 ゝゐゝ
ゝまゝほゝめゝんゝくゝのゝまゝてゝなゝかゝ
うゝうゝうゝつゝうゝさゝゐゝ係ヨリ
ゝうゝうゝさゝゐゝひゝなゝしゝゐゝんゝと

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

(一ウ清テン) 着かさてほくあるところて(出ホノミ)ひもゆかれぬさまふかきこと
人やりならぬこの別却(原)のそこ二条わたり河院のおちたち
のまもなくあるのあいやもの
掛てさして(原)
みすすてくあねもゆくとき(三ウ六ホ)
なきよ神をもまもしやとやまし活く車ともうもくう
ものさうしきねなきまくう
もるまもとうる(ン)(スレヾ氏又又ル二氏同ハ越々ラハ半久ハ三ウントン)
もくうもやそ流の涼もめれくひ伊勢まて

(有脱ノ)なきの思ひおこさんこともうさてうちをは
てゐやものしくなりうかきる事
をそうくなもまもうこともおもて
つくくなりぬほけふ(源ノ)
こちおこひ(原)
めかくをなうもやらんまあの社もあるよの山
ときちかきくうあのうちを結ふ人
やうもす物さひきかなひ(双地)
さひのうちをいふ(三ウ六)むつくなりてなくおよく
きん院(桐)のあやき袂月まなく
おそくまを学申かねてやをうちうも

(三ウ六ホ思カ)
(并行ナリ)
(ほホ)
(三ウ六ホ)
(ただし行ナリ)
朱雀

（係ノ）
やをなりうるまでそことうちたゝ
たくもあるをそ紙みなまて世もいとものさうさ
かさうまてへうつゐさうともまいまうまてとまた
（ナヽメカ）
ふ四十九日までをかたうそあさうれ院よりの
ひめへうまをうをそめまをちうくまりくおほくく
（はゝそ寄ホニ忌ミ家ヤリカメヤ）
おもそのかたひなれおかりおりうをそ
のかりまをてとまくよかた中之人
（ミ）
ほむのうなり大臣のおひとをもち添へまをむ
おまりのをおくらんをのまうんなくまをうんな
おかすうをなれ（若人）（流ニ）れやしのうまうまをうん
（月迫）
ふまりくまりしうをそ

（唐詩黄我目曙月易高敷信午来ヲ西亦凡）

を思ひつゝやし給まめ時のさなかたようくてとれ
（ほ）
まをまうまうれちの（妾達退出）給ふかおほ
ーえまうまうまをまう（若）宮を三条の宮よりおまう
（若ノ兄）
ひうをよをつゝ宮をうちうへうまうちう風まを
しうて院のうちやうく人ゆうれめまをやうな
（ほ）
おまおほ殿こまくみおりまをおやうまうまを
（ニ）
（ン）
（ヲ）
（共ニ）
そのてみそ
（松ニ君子ノ徳アリ）
（共ニ）
うをひろみなのみ松やうまうんしまを
（ソレホト面白カラヌ子ト）
ちりおくまうのまうおのとうまうまをうめ
（源）
よおうまうう物名まくまおれ神うまうめ

のひさなうあるころ
源
さしもさしも池のうみのさ
うもとめうつ
源ノ三九右京大夫
しうたやうに
王令婦
年くれてさひしき井のみもこもりつ
のみをもわれうの記有言
のさうえくへ
天下通宝
ねとおもひうつ
三条ノ長也
つくる
世財院ニ内座アリシヘ
つくしのしらしのまつ
源廿三
うちむらんくさうへ
源
昔のゆくへ
三条院ノ御ノ
めなくてみうのそりてなく
三ケ大変ヘ
ひさ車うすくさくひ
源ノ時ハ
ろおさくみしひたてきき
家司
うくこそひさうを記
源
うつおもひをれくさまきを
脇
ひさ殿を二月より内行ノ
院之時ノ
まやうあさより成のうつ
脇ノ朱
なくりくてんもうくれうす
朱雀院人ノ
まうさうつまち給中

とつまを添ふまじきことをおもひ
ざるべし（朳カシ玉ニテ後）当よりはかく添うべきさまなどをこまやか
なかたらひ給ふ（三）そう心ばへなどまめやかにて
まもりおくべきことなれまよこなやみ（朱）
ものおぼえぬ（朳）ほどの添ひぶしをぞ多
かるべきを（朱ノ）それとわうなきまでもてなし給ふ
おほ（ヒ）ひ弱（朱ノ）しきまもりて
なるべし（朱ノ）もてなしかしづき給ふ
もうひさしかるべきことなどを（添トヘ）
もはら心ざしうつくしげなるさまを
やうやうつくしきのこまやかなるを
しもはた心ざしうすきやうにて（豚）
ありなんとおぼしたるを（ヒ）
やうやうすこし結ぼほれ（ホシ）
やうまやすし結ぼほれ（ホシ）
かねもの（豚ノ女房云）ものをのみ思ひそへ（ホシ）
まもられ（ホノ歌）ばあやしくものづつみ（双花二支云ホノ外ノ云）
めるものの（ル）ものをのみ（ル）
そうなどゆゑゆゑしくよみをき（ホノ歌）
ものそこなはれ（豚）ぬべきことをのみ
いうべうんでうなどをもの
てみまもり（ホシ）給ふにぞ（ホシ）

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』　請求記号

ガラス使用

ゐつゝうらうたきをなうの
さまぐのうつくしさまさり海の
ありなどいふ(ノ上ニ)のあひれ娘(ノ上ニ)
すゝこむわすれ給へるほど
れぼれのうつくしみ給まゝ
もう前のふむちに行ゝ
さ海なともさゝこまごと人と
(着ヨリ恩ニミセケル右ニヤ)
物うそなく思ひめやして
ますや海こゝろいうわひ
なとなくひなく覚給ふ(ミ)
ぬ(ノ)の内ゝつゝひへき(ノ)
(世云上ノ見テ恩ナクサメントシ)
その思ひが
(原ノ若ノ久ノ見ル)年は
(一ミセナ)
ゝ思ひつゝくさ紙
(若)
れなもひる
ひまを紛るの
ひきこもりひ
むちひくやをう
(若)
ゝ行うと

志給ふひきこもりひ(ツ)やもひ
やをうおやまてやのてひ
むちへうとひやゝほ
(見)
おとよ給ふ紙をひ(ツ)ひ(ツ)ゝ
らひ(ツ)ゝつゝうくられ
くゝをのもの(ノ)ものゝ(ノ)をれ
(原ノ)ゝおゝら世紙をそ
(現)
これてうしさ海ともの
ゐくうもやくどさ
ゐ(ノ)ゝふむほ(ノ)
やまゝをうらゐおもてん
(若ノアラバ)

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

出でくうんさせ給て（原）
とく〳〵芳野のつゐおさなおおの
天人（注云）ともうやおおいくらおち
給よ法師ともくのあのをとくう
ゐく菊の花あさうと文おなな
もとうるのれとうのうえのいを
まうれくなひ婚（将）のをとなのの
ちさなる力とそてなやひうれと
つゐ（原ノ字ナシ）のいやなうとさとるまく念仏前生極楽寺
とうらのつくおこるひのうい
まいおうやとなつまつ（原）
ありをなりさもう
ちさなる力とそてなやひうれと
つゐのいやなうとさとるまく念仏前生極楽寺
とうらのつくおこるひのうい
まいおうやとなつまつ（原）
ありをなりさもう

て思ひいくられそいおとうろきひ（カ）
うえ日うすもおおうなくのう
文うるうをけうやすし結ぶる（文言は注文ナイ）
ひとゆうみちなれとうれくもな
おそさまとくうんきくし（法文本）
すゝひゆうれとうふなみち
うとをうえ少人うでし（原）
おさちみの春のをとよむを
うそとづひなえなとこうやう
なえ許ひ立ふのうえしえし
風（注）ふきまうみくえ（原分ヤ注ナシ）

とのみありて御てはいとをかしうのみ
なりまさるものかなとひとりこちてうつくしと
ほゝゑみ給つねにかきかはし給へはわか御てに
いとよく似ていますこしなまめかしう女しき所
かきそへ給へりなに事につけてもけしうはあ
らすおほしたてたりかしとおもほすふきかふ風もち
かきほとにて斎院にもきこえ給けり中将のきみ
にかくたひのそらになんものおもひにあくかれにける
をおほししるにもあらしかしなとうらみ給て御
まへには

かけまくはかしこけれともそのかみの秋おも
ほゆるゆふたすきかなむかしをいまにと思ひ給
ふるもかひなくとりかへさるゝものゝやうにと
なれ〳〵しけにからのあさみとりのかみにさかきにゆふ
つけなとかう〳〵しうしなしてまいらせ給
御かへり中将まきるゝことなくてきしかたの
ことを思ひ給へいつるつれ〳〵のまゝには思ひや
りきこえさする事おほくはへれとかひなくのみなん
とすこし心とゝめておほかり御まへのはゆふの
かたはしに

そのかみやいかゝはありしゆふたすき心に
かけてしのふらんゆへちかき世にとそある御て

又すきゞしき哥かたりなともかたみにきこえかはし
させ給つゐでにはかの斎宮の下り給ひし日の事かた
ちのおかしくおはせしなとかたらせ給ふに我もう
ちとけて野の宮のあはれなりしあけほのもみなき
こえ出給てけり廿日の月やう〳〵さし出ておかし
き程なるにあそびなともせまほしきほとかなとの
給はす中宮のこよひまかで給ふなるとふらひに
ものし侍らん院のゝ給はせをく事侍しかは又
うしろみつかうまつる人も侍らざめるに春宮の御
ゆかりいとおしう思ひ給へられ侍りてとそうし給ふ
春宮をはいまのみこになしてなとのたまはせを
きしかはとりわきて心さしものすれとことにさし分
きたるさまにも何事をかはとてこそとしのほと
よりも御手なとのわさとかしこうこそものし給へ
けれ何事にもはかばかしからぬみつからのおも
ておこしになんとの給はすれはおほかたし給わさ
なといとさとくおとなびたるさまにものし給へと
またいとかたなりになとその御ありさまもそう
し給ひてまかで給に大宮の御せうとの藤大納言の
子の頭弁といふか世にあひはなやかなるわか人に
て思ふ事なきなるべしいもうとのれいけいでん
の御かたにゆくに大将の御さきを忍ひやかにお

つ(ゝ)ゝ(ゝ)さらとまるて白虹(ハツコウ)の
みをちがふといやゆらうらうよう
ねいもまもゆーときゆくへやと(孫)
へ西(ミ)の西(ゝ)ゝきこいやをかうう
よのそやの雨(あま)ふとうたてゝきく
いへ(ゝ)ゝうるやゝゝうるよわ(ゝ)
されもやゝ(ゝ)ゝきこてうつそてう
ゝあゝゝひく今(ま)でゆ(ゝ)ゝ(ゝ)
月の光(上句ナシ)やうなゝ(ゝ)ゝ(ゝ)ゝ
びせき愛(め)ゝゝいゝゝゝうゝゝ
やゝゝゝうゝおゝゝみのきめ(ゝ)

まるゝゝゝゝゝ
九重(ここのへ)(冷泉ナトシヨカラン思フ人ノ心ニ帝シメトフ)
ゝきもやをゝゝ玩(もて)ふ(ゝ)
かゝ思ひ(ゝ)ゝかなゝ(ゝ)ゝ
かゝれ(ゝ)ゝゝゝゝゝゝ
ゝよゝゝゝゝゝゝゝゝ
(西ノ中文ハ元ノ詩下ハ孫ノ思ノヨミ玉フ中文ハ今ノ詩ナリ)
月うちみ(ゝ)ゝゝゝゝゝ
のゝゝゝもうゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
思ひやゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひきゝゝゝゝゝゝゝゝ

山桜ヲ折テ送リ給ヒシ人ノ心ヲ思ヒ出テ

（起）
ゆふまぐれ八ツ九ツのほどに
とばかりたゝずみ給ふ
おもいでられ給ふ（中宮ノ給フ）
ほどもなくて（院）
ほどもなくて
つまもなくて
（院ノ）
十月比
（カン）
本つ巻の映ほどを
おさのつぼねなどもし給へ
うれづらなるひとゝ
らをぬらし給へ

（カンノ巻リ）

（脱ノ如ク）
をとりいだしなどもし
ありくれどとかくして
（決文討）
（近侍司ノ下ニ依リテ）
（川ノ字ノ方ノ二依リテ）
入さをのぼりて
をとり出給ふ
ありくれど
なんとつきごろ
ごろはうむきふさ
うえ
うひみぞて
ぬるとやみのうふ
も物とす
かやうかたゝ
なさけあるさまに
入さをのぼりて
をとり出給ふ
ありくれど
なんとつきごろ
ごろはうむきふさ
うえ
うひみぞて
ぬるとやみのうふ
も物とす
かやうかたゝ
なさけあるさまに

自町ニモ　双地　此ノ條ノ上ニ心ノ一ニヤ
キワカヒアリナン

おさおさうつくしき中宮へ院の御
きぬ八ッ　枕カタチカ玉ヘキ志ノオイ
海のうちさま雪月のつい
海ニ　原
ともしきまで殿ら　枕
かうもとおぼ殿ら　枕
つもるよはひくれとも
原
なくらふるまをうのまとも
うのふるまをもちしてふ　枕ノ
ぬ袖うへさ海なれやうくる
ふるまを思ひな
なうへしまうつ　ネノ下ニテヨロシキヤウ
ニ直ス
ねうつうをうつねん人

まさこうふうくをもなくへ
のちて雨なる雪のしふ
十二月十五日うつ中宮のみ
なうとまくまくやうせ
め玉のちくちもの
海ニとくへさを給へつ
なふものつなうすおとまを
つなも佛ふ
まことの極楽ひやらうこ
ねうへうの日ふ
まうえ同のひなれ上達部と

院ノタメニ在ス、カラス三十ヒキリメニ

をとこもまうでつゝ結ぼゝれをゆひ
なをの強飯いゝもゝむこゝろまさ
まことにありがたうおぼゆ
もいとうつくしみをさなのやう
持(モテ)仏(ホト)おろがみ経(キヤウ)よむこゑ
つゝ物なれ書(記者)よれるこゑのやう
さびたるつゝうらうしさ
乃日そまうでぬ事をきゝおこ
仏よりをはじめたてまつれる人々
やゐ(ほ)
のこゑもの(ミ)もうこゑ
無(ナシ)
なみいなゝ(中文の出家ノ之助ニ字ヲ添ヘ玉ヘリ)
ほとけよりはじめたてまつれる人々
(苦ノ)
のそをつゝ乳母(めのと)
山の座(ゐ)うて
(苦ノ)
給へよりの給(たま)ふ
(苦ノ)
ちゝまうでこく古(ふる)
(苦ノ)
なうへくる人ぶ(ミ)
やうくうれなうまぎ
きゝもぐ(ミ)
みうひれのまいりこ浄(きよ)へ
さ海(うみ)もとゝまとゝ(ミ)
つま折(をり)ける木(キ)の陰(かげ)
(ミ)
もいぶ(ミ)

みなとゝめつゝひかへし給へるハさらしともて給へくやのし
給へさかたくとしられまことにくおほさるゝまことなとの
さりし人もなくまゐりてみなとなし出給ぬるなら
まそおほやけのことにもやうくんしつかまつりて世
つりとしならむことけしきふるさまゝに月
やくなきに宮の光あひらなる遊ひあつさ所も苦
のこと思ひ乱れてはいかならんなりやうにおもむき
まといそのおもひもまつかしきに入りなりおもひさるを
ましせんとしのもちのふくらめしぬ今はしめて
思ひぬるにこともかくねを継させはしゝ君達
なりつまてさうそくのかへくなしまゐる人にめしそ

やすしからみそのからのきさきひさうあるつゝひさふ
らふ人の見るれなとすひとあやうまゆるまゝひお
ちくうらみおろさくるゝあさのはかなくあるかな
たけまりのまきこ待るにしたことはいかにして
きし給ふ風のみかしら煩ひくるしみをへうらなれま
ほひいやも物うのそくろかるまゝしとてみやうう
のけふりもほのうならたまふ涙もひかりし人かなき
あひめてたく極楽思ひ乱くらのさ夜也春宮
の源つゝひもまいりまろ給ふさ夜にむてやすし給
ますてたゝむせよみやとの人かくてなりくてもやすし
きをやらむを給ふにハ君ねそこと思ひ給へやなし給ひける

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号　　ガラス使用

おほかみなりし給ふくとこれそのものゝ給ふずさは
のこそまゐらせ給ふ井手しみすのへりし几帳をあをき
すびしくひかくびくうけのみしるうすうびく
ちうしの袖ぐちなとやゝなまめかしうおかしくゆう
しう思ひ至る遠給ひともまうち池のうちに水茎なにかの
のはしきつりをとふきさをもなとき給ふくなけゝあ
られ給ふくせんへもいふかたとものびやかならぬし
給へる文をうちまもりてあらし
（大臣）ちゝのおとゞのたゞうちみつゝうちまつ
たゞ泣く松のうち給とやすしの人をおくらふり
もあらずさればゆゝしうやすしのかたおきし給なれ
（中宮ハ近キ）いとゞもらしけちうちむらしかて
（女院）おとゞのかたにおふなけれうち給ふまいらうさ
みのかみつかひ給ふれとの給ふものゝゆかりまうちのあ
それをもなみだくおろくとあはれ給ふや世を思ひす
ましきゝの御方さまのみなしをはけたまけ
だまし給ふくものゝねさもすくひなくわびぬ
さらに給のかむしりとひれあなく世に給ふへ時し
あひのしけるうちひとつ物のて給はけまくの世
とおぼしまゐらとそのかうれぬしてあさいめて
ゆくらおぼしふうてあるなれこふはせても
物あはれなるほとしいへかうもせ給へるいあひさう

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号　　ガラス使用

ひくくうもるこのなとも老
ねたくうそくやまの衣も拔
ぬうちのつゆにそ女院
ずたうくのまつまくくとう
てとうなすすうへつかいな加階
とうてなくたくひやもおく
もうとう浮法をさうまぬ
らめてとこてあてうそれも
てをほうてくしをなれとう
なげふるうやも思人うれ
をぬうまくうまくうまで我力女院
もとうえの世うたりうのふおと
みおりうほくぬこうひそのう
ぬ人しれすうやうくゆくしう
ことうれもうまくうれぬうそゆう
ぬくと佛てなんしうやし紛つまし
ぬふもしみをわ紛ひてこと
ぬ殿の人とうもくさ佛
みあまくび華りうくうおう
をたのおくもおやうまくる
衣のうくまに物うくおう
ぬとみうやきあぬのやうと

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号　　ガラス使用

なとつくし給へしのことのさうびかしきへつり
されても秋の花ゆゑの色よりもをかしやかにまさります
ほうしなりけるうちとをあつかひ給ふ中将の御子のこと
しはしめて殿上す八九つはかりにていとらうたけなり
しろくさうの笛ふきなとするをうつくしみ給ひ
あそび給ふ宮のおりしの兵部卿なりけるをこの人の里
あるよせおもくそたまはしいとまつるむへ
へもやくしうちもおもしろくてうちひ
のすゝしこれわかとかたちこそ綾なりしてう
さまいとらしきあはれ給ふめいてうつ大納言
ゆくゑもうらみこき給へるほのかのにほひする物

なくみえすものゝかくるよしひと色あさやかのかゝり
すれ給るちくるにもえてうしなひはみなかくると年ゝ
いちにちそうをとととつかへさくみさくさうりて御
をおもし給ひぬくつまうこのまかう物をさゆる義成
うふとるめのすえのかみいつうけ給りの
それもこやけさひかへるとつ花るまとに
君の御ひとそうみるなりくともてかけ給
時なりてけもく花も夜の前まはまえて苦
志るわいほどなくまろくいふ物をそこら湯
どきてらうゆうくさあるめしなそそとりかに
ゆくゑしるきこと給ひけるのしるやうりんか

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号　ガラス使用　挟み込み物

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』　請求記号
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

四十七枚

国立国会図書館

なろ(ロ)てうくよをうつのふんみまゝゆう
まろうのほこゝろをゝくみ(ロ)ふうつゝとゆうんみ
ややもうをゝ治へよ(ロ)こゝろふまゝ(ミ)
うくこと(右ト脚)伝ふまゝてひさもみそうほゝむ而
なくさていうま物をゝおらしもゝこゝろにあろめ
うう(ア)せゝおくまうまやをおゝ(ロ)なをかをゝいみ
しうめさまゝくこゝ元ほるてゝよそうゝそあゝも
うまへいてんまゝよゝ式たうなりとおゝめゝ
まべし

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』　請求記号